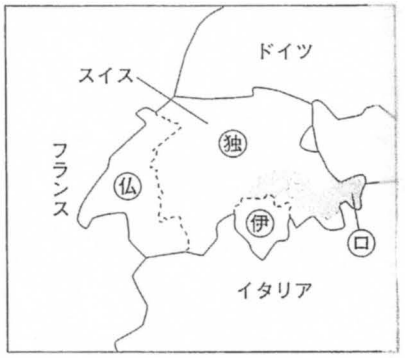
梶茂樹・中島由美・林徹『事典 世界のことば141』 大修館, 2009.

113 ロマンシュ語
ROMANSH

【主な使用地域】 スイス連邦26州の中でアルプス高原地帯東南端にあるグラウビュンデン州で使用されている。言語人口は、2000年の国勢調査ではスイス国内の英語人口より少なく、第一使用言語としては35059人(言語人口比0.5%)の少数者言語である。スイス連邦の憲法には4つの公用語として、ドイツ語(63.4%)、フランス語(20.4%)、イタリア語(6.5%)、そしてロマンシュ語が規定されている(地図にそれぞれの主な使用地域を丸付き略字と影で示した)。



どんな言語?

ロマンシュ語はインド・ヨーロッパ語族ロマンス系言語の1つで、イタリア北部の少数者言語のいくつかとともに「レト・ロマンス語」というグループを形成しています。その中で、特にスイス・アルプス地方では後期ローマ時代以来ゲルマン系民族の一派アラマン族との接触が強く、ロマンシュ語の形成はまずアルプス先住民のことばがラテン語と混淆し、続いてゲルマン語からの絶えざる言語干渉の結果生まれた言語だといえます。この歴史は言語構造にも反映し、ロマンス諸語のなかでは、フランク族などからの影響が強かったフランス語とともに、類型論上顕著な特徴を示します。とりわけ、ドイツ語にみられる動詞第二位置(後述)、文主語の明示が義務的なこと、などの統語規則上の大原則を共有しているロマンシュ語は、他のロマンス系言語と一線を画し、ウォーフ(B. L. Whorf)の呼んだStandard Average European(標準平均的ヨーロッパ語)の1つということになります。

例をあげると、通常の肯定文では主語+動詞+補語/目的語の順に、《*Vus* **tuornais** a chesa.》「あなたがたは家に戻る」と言いますが、「家に」という状況補語をトピック化して文頭に出せば、A chesa **tuornais** *vus*. のように主語を倒置させるのがふつうです。しかし、動詞の第二位置は変わりません。疑問文は、動詞+主語の順に倒置させて有標語順 **Tuornais** *vus* a chesa? とするのも、ドイツ語・英語・フランス語などと共通している類型論上の特徴です。他のロマンス諸語にはこのような一定した語順への拘束力は強く働きません。

音声面では、「ケルト基層」の影響といわれるラテン語uの前舌化したü [y] と、それに伴いøとœも存在することは、フランス語を想起させます。しかし、ロマンシュ語にはフランス語が早い時期に失ったとされるts, tʃなどの破擦音の系列がありますが、日本語の「ツ、チュ」に近い音なので、日本人学習者は発音にはさほど苦労しないでしょう。

語彙面では、ある統計調査によれば、基本語彙はラテン語系が75%、ゲルマン語系が19%、ケルト語系が2.5%、その他2.5%ということであり、ロマンス諸語の中ではゲルマン語からの影響が強く見られる言語といえます。

使ってみようこんな表現!

ウィンタースポーツで有名なサンモリッツの町があるエンガディン地方で交わす挨拶《Bun di!》(ブン ディ)「おはよう(こんにちは)」は、知り合いでも初対面でも問題なく使えます。昼食が終われば早くも《Buna saira!》(ブナ サイラ)「こんばんは」となりますが、夕方前でも普通に使うので、日本語に訳せません。

軽く《Allegra!》(アレーグラ)と言えば、「やあ!」「ごきげんよう!」という感じで、スイスのドイツ語の《Grüezi!》と同じくこれ1つで万能な表現です。続くことばは、《Cu vo que?》(クゥ ヴォ ケ)「お元気ですか?」となります。このqueは「それ」という指示詞ですが、ここでは形式主語です。英語の「状況のit」やドイツ語のes、フランス語のilやçaによく似ていますが、これもロマンシュ語がゲルマン語的である特質の1つです。この疑問文に答えるには、きわめて不調の時以外はとりあえず礼儀として《Fich bain!》(フィッチ バイン)「とても元気です!」と答えることになります。

さて、道で初めてことばを交わすとき何語で言おうかと迷うことが多いのは困ります。ロマンシュ語率の高いエンガディン地方でさえ町の中ではドイツ語の方が多く聞こえるからです。しかし、この地域では勇気を出して、ロマンシュ語で挨拶をしたいものです。反対に、東洋人の我々に対しても現地の人は何語で話しかけるか、悩んでいるに違いありません。サンモリッツのみやげもの屋で、「カワイーイ」と挨拶されたのには苦笑しました。きっと日本からの団体客が置いていった響きなのかもしれません。

ロマンシュ語の今

スイス連邦はウィリアム・テルの逸話にみられるように、その建国の初めから周辺諸勢力に対して内向きに結束する傾向を持っています。国際連合にもEUにも加盟しないで独自性を守る一方、内的には統合の1つの象徴として、1996年3月の国民投票によりロマンシュ語を「(母語話者が使用を望む場合には)公用語」という地位を与えました。周囲をドイツ語圏、イタリア語圏に囲まれているため、ロマンシュ語のみの使用者はもはやごく少数で、高度なドイツ語・イタリア語を使える二言語併用者、三言語併用者が圧倒的多数を占めています。このため、職業生活やメディアなど実際のコミュニケーションでは、グラウビュンデン州の内部でも相手の言語に合わせてロマンシュ語以外の言語を使ってゆくという状況が一般化してしまっています。時代の要請で日々新たに作られる新語や借用語の実態をみると、様々なレベルでロマンシュ語への言語干渉現象が強くみられ、社会言語学や言語接触・言語政策の研究には格好のフィールドとなっています。

お奨めの本 ロマンシュ語を含むレト・ロマンス諸語に関する言語特徴の概要を知るには、〈言語学大辞典〉第4巻(下-2)(三省堂、1992)に含まれる「レト・ロマンス諸語」「ロマンシュ語」「ロマンス諸語」の関連項目を参照してください。簡略的な記述としては、『世界の言語ガイドブック1』(三省堂、1998)の「レト・ロマンス語」をご覧ください。とくに、スイスのロマンシュ語について歴史・文学・文化背景を含めた多面的紹介は、「レト・ロマン語入門(1)〜(6)」『月刊言語』(大修館書店、1980)の連載記事が詳しいでしょう。また、スイス・ロマンシュ語の詩と民話の紹介・翻訳は、『スイス詩集』(スイス文学研究会編、早稲田大学出版部、1980)と『スイス民話集成』(スイス文学研究会編、早稲田大学出版部、1990)にあります。

現地で出版された入門書としてはCDの付属した教科書タイプのG. Menzli, *Curs da rumantsch grischun I* (Chur, 1988)がお奨めで、会話や簡単な文章と解説・練習問題付きで自習もできます。これは人工的に作られた統一文章語Rumantsch Grischun(ルマンチ グリジュン)のバージョンですが、方言ごとに平行して編集・出版されており、対照してみるのもおもしろいでしょう。いずれも、ロマンシュ語連盟Lia Rumantschaで購入可能です。

最近は、オンライン辞書が充実してきました。英語との対訳辞書であれば、My Pledari(http://www.pledari.ch/mypledari/)を、ドイツ語との対訳辞書であればPledari grond(http://www.pledarigrond.ch/)が利用できます。後者は代表的なロマンシュ語大辞典である*Dicziunari Rumantsch Grischun*(Chur, 1939-)の編纂局の監修によるもので信頼でき、動詞変化形などの文法項目も記載されています。

ロマンシュ語を話す人々

かつてコーカサスとアルプスとピレネーを結ぶヨーロッパ全体に印欧語族に先だつ民族が住んでいたというアルプス基層説という壮大な仮説がありました。記憶に新しいのは1991年9月にオーストリアとイタリアの分水嶺近くで氷の間から凍結ミイラが発見された事件です。身につけていた武具や薬草など所持品も見つかり、タイムカプセルのような保存状態のきわめてよい遺体はインスブルック大学の解剖学教室で検視された結果、紀元前3350年から3110年の間に生存していたということもわかりました。ローマ時代から遥かの昔、アルプス地域の先住民についての第一級の証人ではありますが、この男性の言語がどのようなものであったかを確かめる手がかりは見つかっていません。ローマの歴史家が、アルプス征服の際に敵の兵士たちが現地のことばで雄叫びを上げていた、と記しているので、いわゆる言語基層としてはアルプス先住民の言語があったことは確かですが、アルプスの語源となったalpなどいくつかの語彙の名残を除いて、詳細は不明です。

ルネッサンス時代に湧き上がった民族の言語、ロマンシュ語に対する誇りは、聖書の翻訳や英雄叙事詩に結集しました。この想いはドイツ・イタリアの覇権に挟まれた20世紀中頃になっていよいよ強まり、「ドイツ語でもなく、イタリア語でもなく…」と叫んだPeider Lanselの詩集に結晶化しています。

春祭り(3月1日)は子どもたちも活躍

新しいロマンシュ語は上品な言葉？　　ロマンシュ語

1991年の夏の終わり，イタリアとオーストリアの国境に近いアルプスの尾根（標高3,210m）で，とけた氷河のすき間から一体のミイラが発見された。その後の科学的調査により，それは約5,500年前の初夏に雪の峠道をたどっていた男であることがわかった。身につけていたアルプス越えの装備や，数種類の薬草，弓矢やナイフの武具などの発見とともに，どこから来てどこに向かっていたのか，誰に会いに行こうとしていたのか等々，その人物像が話題になった（現在は，北イタリア・ボルツァーノ市の「南チロル考古学博物館」に収蔵・展示されている）。しかし，近くの谷の名前をとってÖtziという愛称がつけられたこの猟師（？）が遭難したのは，どう考えても印欧（インド・ヨーロッパ）語族がアルプス地帯に到達する以前のことであり，もしやローマ人たちが後に「レチア」（Rhaetia）とよんだアルプス基層言語の話者であったのではないかと思うと，想像に羽が生えてくる。

その末裔たちの言葉ともいえるロマンシュ語（rumantsch）は，スイスとイタリアにまたがるアルプス地方で伝承されているロマンス系の言語である。年々，周辺のドイツ語やイタリア語に浸食されて言語地域がせばまり，現在ではスイス第4番目の公用語とはいえ，スイス国内では，その言語人口（調査によって3〜4万人の幅がある）はスイス国内の英語話者とほぼ同数になってしまっている。この言語の分布地域はグラウビュンデン州というスイスで最も広大な面積をもちながらも，けわしい山岳地帯のため村落が谷間に点在して言語的・文化的な交流が乏しかったこと，政治的・経済的な中心地がなかったこと（州都クールは中世末期にはドイツ語化して，ロマンシュ語の発信地ではなくなっていた），そのために方言が独自の進化をとげて共通語的な言語が生まれなかったことなどが，ひとつの統一的ロマンシュ語をもつにいたらなかった原因であろう。

もちろん，方言間のコミュニケーション上の要請は共通言語を必要としていたが，それぞれの谷の宗教的・政治的なおもわくもあって，どれか特定の方言を優位におこうとする共通語化の運動は何度となく生まれては消え，事実上はスイス・ドイツ語が話しことばの，標準ドイツ語が書きことばのリンガ・フランカとなっている。ところが20年ほど前から，やはり自分たちのロマンシュ語諸方言を基盤とする共通的ロマンシュ語がほしいという動きが強まり，語彙も綴りも，諸方言間の公約数的な性格をもつグラウビュンデン（現地ではグリジュン）・ロマンシュ語（Rumantsch Grischun）が考案された。近年，その普及は言語政策としての予算的基盤も得て，クール市に本部をおく「ロマンシュ語連盟」（Lia Rumantscha）を拠点として，主に書きことばの普及が積極的にすすめられつつある。

さて，わたしは本書の各項目を執筆するにあたって，まず現地の人々にどの谷の方言を基本におくべきかを聞いてみた。ところが，異口同音に，今からロマンシュ語として紹介するのであれば，ぜひとも新しいロマンシュ語で書き記してほしいという。しかしわたしは，いまだかつてRumantsch Grischunがじっさいにしゃべられているコミュニティーに行きあったことはない。考えあぐねたわたしは，現地の総本山「ロマンシュ語連盟」に乗りこみ，じっさいに使われている場面で「出会いの表現」を採録することにした。調査は順調に進み，数人の職員から，日常的なあいさつから応対の表現までをRumantsch Grischunで得ることができてほっとした。ところが，電話での「もしもし」（No. 21）や，慰労するときの「お疲れさま」（No. 26）あたりから雲ゆきがあやしくなり，とうとう叱るときの「こら！」（No. 28），ののしるときの「くそ！　ばか！」（No. 29）にいたって完全に返答につまり，No. 30に記したAh, Ah ...を繰り返すばかり。そのうちひとりが，いきなり部屋を飛び出して「ロマンシュ語連盟」のスタッフをかき集め，みんなで頭をひねりだした。どうやら，その人工言語では，下品なことばづかいはまだ生まれていないようなのだ。しばらくして，申しわけなさそうに，「ちょっと自分の母語であるsursilvan（ライン川源流地帯の方言）の響きがするけれど…」とことわって教えてくれたのが，本編にあげた表現である。本人たちに書いてもらった綴りも，それらの「新出」単語の表記にあたってはまだ不安定なものらしいということもお断りさせていただきたい。

アルプスの尾根と谷を縦横に歩き回った5,500年前の男には，コミュニケーションの苦労はなかったのだろうか。かつてスイスの言語学者ソシュールは，「言語にはesprit de clocher（内向きの，おらが村根性）とintercourse（外向きの，交わりたいという気持ち）の2つの力が働く」といったが，はたしてスイスのロマンシュ語の将来には，どちらの力が優勢に働くのであろうか。

（富盛仲夫）

石井米雄・千野栄一編『世界のことば・出会いの表現辞典』三省堂，2004.